

フィルム・キュレーションの可能性——映像アーカイブとフェスティバル

田坂博子（東京都写真美術館 学芸員）

The Possibility of Film Curatorship: Moving Image Archive and Festival

TASAKA Hiroko

Curator, Tokyo Metropolitan Museum of Photography

1. はじめに

「キュレーション」という言葉は、従来、美術館、博物館の学芸員を示す外来語である「キュレーター」に関連して、主に「展覧会を組織する」「博物館を管理する」という意味でしばしば美術館や博物館の領域で用いられてきた。近年では、狭義の意味をこえて、情報を再定義し、編集していくという意味も含め広義で用いられるようになってきている。ここ数年で私たちを取り巻く生活環境は劇的に変化し、なかでもインターネットの普及は、個人がDiY (Do it Yourself) の形で自らの生活をコントロールすることを可能にし、「一億総キュレーション時代」とも言える時代を実現してきたと言えるだろう¹⁾。このような状況下で、むしろ芸術領域における狭義の「キュレーション」のあり方も刻々と変化してきている。

筆者が、一スタッフとして従事している、東京都と東京都写真美術館が主催する恵比寿映像祭²⁾は、展示、上映、イベントに加え、シンポジウムやディスカッションなどの形式をとりながら、「映像」について横断的に考察するフェスティバルであり、現代美術を中心にしながら「映像」のオルタナティブな可能性を検証する意味で、通常の映画祭とも、またアートフェスティバルとも一線を画した試みを行おうとしている。ここで注意すべきは、「映像」という対象が、いまや芸術領域だけでなく、私たちの生活圏において社会的にも日常化したものとなっており、映画、テレビ、ビデオ、インターネットといった広範なメディアの問題を包含している点である。最先端の現代美術の事象をとりあげながらも、同時にアーカイヴ的な事象をも題材にする、このようなフェスティバルにおいて、「映像」の「キュレーション」は、より複雑な要素と課題をもつことになっている。この論考では、欧州で行われてきた「フィルム・キュレーション」の具体的議論をとりあげ、「映像」という観点から、今日における「キュレーション」の可能性を検証するきっかけとしたい。

2. フィルム・キュレーション

そもそも「キュレーション」という言葉は、狭義では、美術館や博物館の領域で用いられ、通常の映画祭や映画領域では、フェスティバルの企画者や上映企画者は、「キュレーター」ではなく、「フェスティバル・ディレクター」や「プログラマー」と呼ばれている。映画や映像の領域で、「キュレーション」という言葉を用いるのは、そこに映画祭等のフェスティバルが内包する実践的な問題だけでなく、美術館や博物館がもつ事象が含まれるからである。

2011年開催の第3回恵比寿映像祭では、クロアチアの映画祭「フィルム・ミュージーションズ：インヴィジブル・シネマ・フェスティバル」³⁾のアーティストック・ディレクター・ターニャ・ヴルヴィロを招聘し、「フィルム・キュレーションをめぐって」という題目のレクチャーが企画された⁴⁾。2007年に創設されたこの映画祭は、まさに「フィルム・

キュレーター」を創設メンバーとして結成されたフェスティバルであり、従来の映画祭という枠を超えながら、横断的な議論を展開している点で、恵比寿映像祭とも親近性を持っている。しかしながら、「フィルム・ミュージーションズ」では、従来の映画祭に中心的であった作家主義的観点から離れ、徹底したキュレーター主義のもと、数人のキュレーターの上映企画と同時並行で、キュレーターたちのディスカッションやシンポジウムをフェスティバルの核とする企画が実現されている点で、とりわけ特筆すべきフェスティバルとなっている。

「フィルム・ミュージーションズ」の映画祭に先駆けた事例としては、2005年にオーストリア・ウィーンで、「フィルム・キュレーターシップ」をテーマにした議論が行われた。この内容は、2008年に同名のタイトルでオーストリア・ウィーン映画博物館から、映画博物館のシリーズ書籍の第9巻として出版されている⁵⁾。編集メンバーは、パオロ・ケルキ・ウザイ、デイヴィッド・フランシス、アレクサンダー・ホーフス、ミヒャエル・レーベンシュタインら映画保存に長く従事してきた、アーキヴィスト、アーカイヴのパイオニアたちである。さて、この書籍のなかで、「フィルム・キュレーターシップ」は以下のように定義づけられている。

フィルム・コレクションを厳選し、フィルムの保存、ドキュメンテーションを行い、またアーカイヴ公開という意味での展示を行うことで、映画の美学や歴史、技術を解釈する方法⁶⁾

この定義自体は、文化財としての映画や、物理的な映画フィルムの保存管理を目的とするような、例えば、国際フィルム・アーカイヴ連盟 (FIAF)⁷⁾ や映像アーキヴィスト協会 (AMIA)⁸⁾ で行われる議論と関連した映画保存の問題を前提としている。しかしながら、この「フィルム・キュレーターシップ」の議論で画期的だったのは、いわば「映像の体験“Moving Image Experience”」に重点をおくことで、「映像“Moving Image”」という広い枠で、アーカイヴの立場からフィルムを再検討し、自由に議論しようとしている点である⁹⁾。そこでは、保存“preservation”の問題と、発表、展示“presentation”の問題が、並行して扱われている。このような議論においては、フィルム・アーカイヴのみでは、細分化されてしまう議論を、美術館におけるフィルムのコレクションや保存の問題とも結びつけながら議論することが可能である。

3. フィルム保存と実践—日本における問題

実際に、映画保存という観点から考えれば、例えば、恵比寿映像祭で行われている事象は、東京都写真美術館という美術館で開催されるという点で、美術館における映画フィルムを保存していくアーカイヴ的な観点を射程に議論をしていけるかもしれない。しかしながら、日本の美術館において、学芸員が、アーキヴィストの職能をもつ事例は

少なく、35mmフィルムの商業映画以外の8mmフィルムや16mmフィルム作品を所蔵している美術館があるにもかかわらず、厳密な意味での美術館における映画フィルムの保存は、日本においてははまだ大きな課題であり、ウィーンにおける「フィルム・キュレーターシップ」の議論の前提となるような映画保存には、ほど遠い現状がある。むしろここで議論すべきは、アーカイヴ構築に伴う保存という問題と同時に、どのように展示し、上映していくか“presentation”の問題を同時に考察していく観点そのものである。フィルムの保存という物理的な実践とその「発表“presentation”」は、同時にいかにその映画を歴史化していくかという作業にも関わっているからだ。そのような意味で、「フィルム・キュレーション」という言葉は、保存と展示／上映の相反する二つの要素を内包している。

勿論、映画フィルムをオリジナル作品として上映していく場合、とりわけ8mmフィルムや16mmフィルムの上映については、フィルムを傷つけてしまったり、退色させてしまったりと、必ずしも映画フィルムにとって推奨すべきではない要素も持っている。つまり、「発表“presentation”」をすることによって「保存“preservation”」の状況を悪化させてしまう可能性もある。しかし、いずれにせよ、オリジナルのコンディションを理解していくことは、その上でいかに映像のデジタル化に着手していくかを決定し、保存と展示、上映が連動した未来へのパースペクティヴを考察するための重要な要素にもなっている。そのような意味で、ここで提案された「フィルム・キュレーターシップ」には、シネフィル的な意味での「映画の経験“Film Experience”」ではなく、「映像の経験“Moving Image Experience”」が提案されているところに大きな可能性があり、日本における全く相反するような現状においても議論の可能性を残している。

4. 今後の課題

今回とりあげた「フィルム・キュレーション」の問題は、非常に実践的で技術的な映画の保存という観点と同時に、いかに映像を経験していくか、インターネットや様々な出力の可能性もふまえたデジタル化も視野に入れながらの課題を包含している点で、今後継続して議論すべきテーマと言えよう。

ここで明白なのは、もはや「キュレーション」は、一学芸員によって決定される「コンテンツ（内容）」だけの問題ではないということである。そこには様々な異なった視座から時に相反する側面を立体的に捉え、未来のパースペクティヴを提案していく姿勢が求められている。とりわけ「フィルム・キュレーション」においては、保存と実践という相対的な要素のバランスを考慮することが重要となっており、より詳細な議論を蓄積していく必要があるだろう。

また美術館における映像の問題を、映画フィルムだけでなく、テレビやビデオ、インターネットなど他のメディアとの関係のなかで、

いかに拡大して議論することが可能かについても、やはり保存と実践という観点から、今後実践的に考察していくべき課題といえるだろう。

[註]

- 1) 佐々木俊尚『キュレーションの時代—キュレーションの時代「つながり」の情報革命が始まる』ちくま新書、2011年、211頁。
- 2) <http://www.yebizo.com>
- 3) <http://www.filmskemunacije.com>
「フィルム・ミュージシャンズ：インヴィジブル・シネマ・フェスティバル」は、レイモンド・ベルール、ニコール・ブルネズ、ジョナサン・ローゼンブラムなど欧州で活躍する映画研究者や映画批評家、フィルム・キュレーターたちの協力により2007年に開始され、2011年で5回目を迎える国際映画祭である。
- 4) 『第3回恵比寿映像祭：デイドリーム・ビリーバー!!』東京都写真美術館、2011年、162-163頁。
- 5) Paolo Cherchi Usai, David Francis, Alexander Horwath, Michael Loebenstein, eds., *Film Curatorship: Museums, Curatorship and the Moving Image*, SYNEMA, 2008.
- 6) 同上、231頁。
- 7) <http://www.fiafnet.org>
The International Federation of Film Archives. 非営利のフィルムアーカイヴのみを対象とした国際的組織であり、映画は各国のフィルム・アーカイヴにて保存、復元、上映され、また国境を越えて、各フィルム・アーカイヴ間にも協力関係が築かれる。日本では、東京国立近代美術館フィルムセンターと福岡市総合図書館が加盟している。
- 8) <http://www.amianet.org>
the association of moving image archivists. FIAFに加盟していないフィルムアーカイヴをはじめ、映画保存に関わりのある組織や団体、研究者等が個人レベルで自由に参加し、情報交換する場を提供する。
- 9) *Film Curatorship: Museums, Curatorship and the Moving Image*, SYNEMA, 2008. p.9.